



苦手は苦手なりに

私は、苦手なものがたくさんあります。

第一に、「虫」です。

毛嫌いとはまではいきませんが、触れずに生きていかなくていいならば一生触らなくていいとすら思っています。(これを毛嫌いというかもしれません)最初に強烈な苦手意識を覚えたのは、15歳の春でした。

地元札幌を離れて、奈良県の全寮制の高校で学校で暮らし始めた私は、そこでゴキ〇リとの衝撃的な出会いを果たしました。

北国では一度もお目にかかることのなかった未知なる生物に、私は身の毛のよだつ思いがしたことを今もよく覚えています。

そして、本州の虫や爬虫類は、総じて北海道のものより「大型」なのです。

夏の風物詩「蚊」ひとつとっても、故郷のそれよりも相当巨大な蚊がブンブン飛んでいます。

しかも、サイズに比例してか血の吸い方にも遠慮がないのです。(あくまで個人の感想です)

色んな大きな虫もそうですし、人生で初めて蛇を見たり、15歳の私が虫嫌いへと進化を遂げるまでにそう時間はかかりませんでした。

ですから、初めていった海外となるカンボジアで、「虫の素揚げ」を進められた時は、絶望的な思いにかられたものです。

しかも勧められた露店では、山盛りの素揚げが所狭しと並べられていました。

今後の食糧難を救うカギは「昆虫食」にもあると言われてはいますが、苦手なものはやはり中々克服することが難しいものです。



第二に苦手なのが、「高い所」です。

そして、「早い物」も苦手です。

というわけで、もれなく絶叫系のアトラクションは大嫌いです。

特に、高い所から一気に落ちる瞬間に息が止まってしまうのです。

一体なぜあの乗り物に高額のお金をかけるのか、不思議でなりません。

乗らなくていいなら、今後も一生乗らなくていいと思っています。

さらに似ているところで、飛行機も根っから嫌いな乗り物です。

大人になってから平気なふりをして乗れるようにはなりましたが、内心はいつもドキドキしています。

これも、仕事の都合上どうしても乗らなくてはいけないことがあるので仕方なく乗っていますが、可能ならば避けたい乗り物です。

一方で好きな乗り物は、船や寝台列車です。

特に寝台列車は、数ある交通機関の中で最も好きな乗り物です。

ビュッフェや寝台、そして車窓から見える景色も、その全てが好きです。

そしておそらく、「低くて」「ゆっくり」だから好きなのだらうと思います。

8年前に運行を終了した「北斗星」(札幌を東京をつないでいた寝台特急)に小さい頃に乘った思い出は、不思議と今も色あせません。

というわけで高い所が極めてな私は、一昨年ユネスコの代表団として上海を訪れた時も、有名なタワーの上層階で表情をしっかりと引きつけていました。



第三に、苦手なのが「音楽」です。

以前に道徳で紹介したかもしれませんが、小学校の頃の授業を受けて「音楽苦手」と感じていた私は、それを長い間引きずりました。

その最たる原因は、「楽譜」が読めなかったことです。

小学校1年生で、「楽譜は読めないもの・難しいもの」と認識してしまった私は、それを中学校3年生まで引きずりました。

その状態で、たまたま高校生から始めたのがバイオリンだったわけです。

実は今でも、楽譜はきちんと読めていません。

自分に合わせて独自に創り出した読み方で読んでいるのと、あとは「耳」を最大限に活用して楽器の演奏を楽しんでいます。

他にも、「絵」が苦手だったり、かなりの方向音痴であったりと、不得手としているものはたくさんあります。

そして、その苦手さは、生涯を通じてそれほど変わらないことも分かるようになってきました。

そういう時は、その「苦手さ」と共に生きていく道を探る必要があります。

忌み嫌うのではなく、苦手さを受け止めて受け入れて、よりよい共存の道を図っていくイメージです。

ですから、究極に苦手なことは、別の方法に置き換えてみたり、誰かの力を借りてみたりと、そういう「工夫」が大切になってきます。

さて、1年生の生活科では、「虫」と触れ合う学びが随所に出てきます。

他にも、プロジェクトの学習で、ソランの森には何度も出入りしました。

そして、子どもたちは満面の笑みで私の所にカマキリやバッタを持ってくるのです。

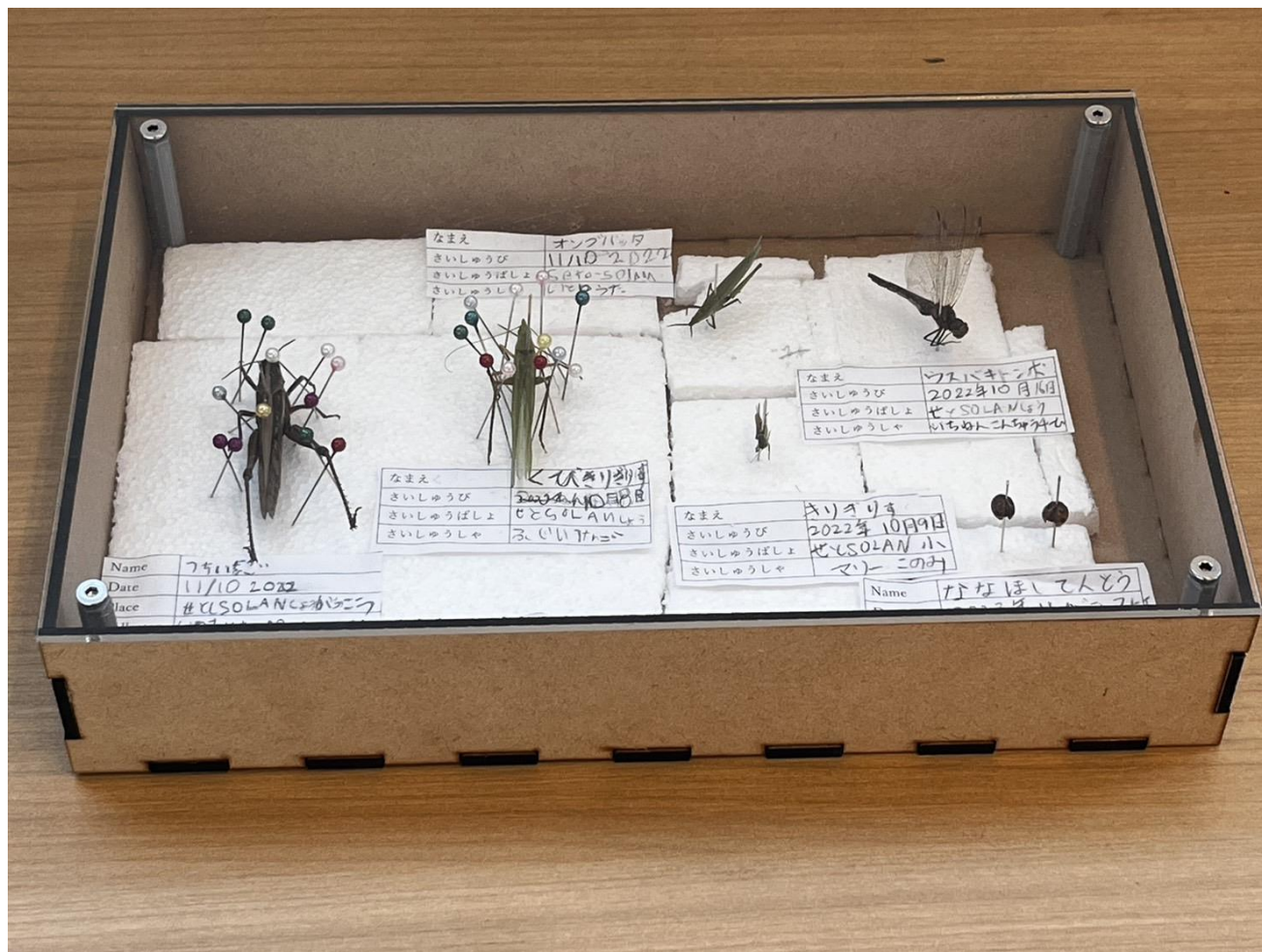
「うわーすごいねー！」と褒めると、そのカマキリやバッタをどんどん私の顔に近づけ、「ねっすごいでしょ！」と大変有難いことにもものすごく間近で見せてくれたりもします。(何度かほっぺたにくっつけられたこともありました)

どれだけ好きになろうとしても、やっぱり虫は好きになれません。

でも、1年生の先生方の中にはちゃんとこうした学習場面を力強くサポートできる方がいます。

その筆頭は間違いなくマリー先生でしょう。

先日も、ソランの森で子どもたちが捕まえた虫たちを標本にして飾ってくれていました。



私には、天地がひっくり返ってもできない仕事です。
苦手は苦手らしく、得意な方に力を貸してもらいながら進んでいきたいと
思います。

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)